夢追い人

夢は自分のイメージした作品像に一歩でも近づくこと

角建具製作所 角 義行さん

角義行さんは、平成三年に福岡県版「現代の名工」に選ばれている。

質の高い建具作りには定評がある。全国建具展や地元大川の展示会では毎回高い評価を得ている。平成二年の栃木であった全国建具展示会では、当時の栃木県知事が角さんの作品に感激し、それを買い上げ、県庁に展示したエピソードもある…。

そして現在では、本業の傍ら、大川インテリア塾の講師としても若手の指導育成に努めている。

角さんの作品の特長は、組子をはじめとする伝統的な建具の技法を生かしながらも、独自のデザイン、技法を開発してきたという点にある。しかも守備範囲が広い。組子、ドア、ホテル関係の備品、一般家屋の建具といった具合である。しかも一品完結。二つとして同じ製品はない。量産家具は造らない。

毎回違った製品作りをするには、豊かな発想力やデザイン力が求められる。どのように角さんはそれらを培ってこられたのだろうか。

「高校時代から建具の道に進む事を目標にしてきました。学生時代は学校の勉強と言うより、空間、屋内デザインの多くの本や雑誌を読みあさっていましたね。」という。それにもう一つ。「若い頃から何に接するにしても、例えばテレビ・映画、旅行の際いろいろな物を見る時、製品のヒント、発想する物はないか、とアンテナを張って来たように思います。」と言われる。そうした姿勢が鋭敏でユニークな発想力を育んできたのだ。

インテリア塾でも生徒たちに、単に技術を教えるのでなく、物のとらえ方、考え方に重点を置いて教える。描いている製品イメージに到達するために、どういう材を選択して、どういう過程を経て、どんな技術を活用すべきなのか、生徒たちがよく考え、自分で発想するように励ます。

では、良い製品作りのポイントには何があるのだろうか。その一つとして、角さんは「素材を見極める優れた力」を強調される。例えば、「木は山の北、南、西、東、どの斜面で生育したかによって性質が違います。風が強い部分で育つと「あて」つまりそりの大きい木になります。最も良いのは谷間で育った、年輪の均等な木ですね。」

それに自然に逆らわないことも大切だそうだ。一般には曲がった木も製材してまっすぐな材として使用している。しかしそれには耐久力がない。例えば、そうした材を家屋に使うと耐久力が三分の一ほどに落ちる。そうすると家屋全体に狂いが生じ、そして雨漏りがしたりして、腐れが生じ、寿命が短い。だから自然に逆らわず、まっすぐの木材を選択する。もちろん場所によっては曲がった材を使う必要もある。例えば法隆寺の梁の話をされたが、その場合はアーチ型に曲がった木材を使うそうだ。それが全体の重量を支え、何百年もの耐久性を生むという。

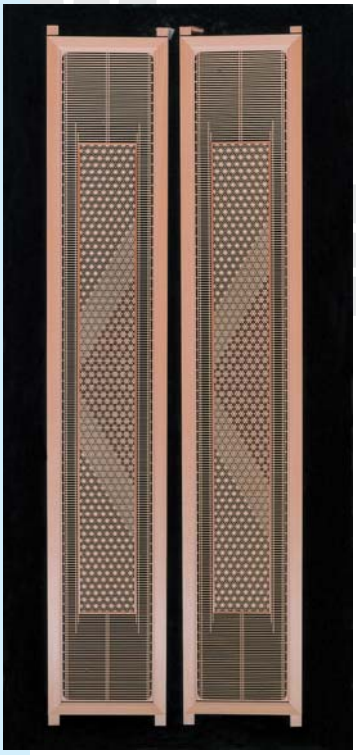
まとめれば、良い素材を見極め、自然に逆らわず、適材適所に使用することだ。

もちろん絶え間ない技術の研鑽も大切だ。今でも著名な仏閣などの解体があると、研修の為出かけていく。解体して細かくしないと、昔の職人が持っていた細かい技法を知ることができないからだ。

平成四年五月にはインテリア研究所で、渡辺建具の渡辺顕策さんと共に天皇・皇后両陛下の前で組子づくりの実演を披露する機会があった。「材料の檜や絵柄の富士山について質問をされました。そのときの会話の内容は今でも鮮明に覚えていますよ」と嬉しそうに話される。

最後に恒例の質問。夢は何ですか？「自分のイメージした作品像に一歩でも近づくことです。なかなか完璧な物はできませんね。でもそれを追求し続けていきたいと思っています。」

天皇・皇后両陛下の前で組子づくりの実演を披露



組子をはじめとする伝統的な建具の技法を生かしながらも、独自のデザイン、技法を開発してきた。